〈論　文〉

幼年期から青年期のワーズワス兄妹

――妹ドロシーの役割――

水　野　　薫

Abstract

Was It For This, composed by William Wordsworth (1770–1850) in 1798 and put in *The Prelude* in 1805, tells us the beginning of the poet's history. The scenic description is quite impressive, especially because of the "voice" of River Derwent constantly streaming, which 'temper[ed]' his "human waywardness" into "infant softness."

However, further investigation into Wordsworth's work along with the letters of his sister, Dorothy Wordsworth (1771–1855), makes it clear that Dorothy herself had been the most significant tutelary stream to nurture his poetic sensibility since childhood, and to calm his potentially explosive mentality. Further speaking, it was she who controlled the complex situation of her brother's "human waywardness" and "infant softness." Everyone knows Dorothy's contribution to Wordsworth in the prime of his life as a poet, but it is also noteworthy to see how she was a brilliant navigator enabling Wordsworth to be Wordsworth from the first.

Moreover, it is interesting to note that the communication that took place between the siblings may represent the English people's mental shift to nature from the 18th century to the 19th century, when they started associating mild complacency with nature, which till then had been regarded as nothing but a manifestation of chaos.

序

ドロシー・ワーズワス（Dorothy Wordsworth, 1771–1855）はロマン派詩人ウィリアム・ワーズワス（William Wordsworth, 1770–1850）の妹で、詩作最盛期に兄を支えたことで有名である。目立つことを嫌った彼女は、日

記であれ手紙であれ、自分の書いたものを公にすることを好まなかったが、そのペンの感受性、正確さ、客観性については定評がある。しかし、ワーズワス・トラスト会長パメラ・ウーフ氏は、「……とは言え、ドロシーは決してプロの書き手ではなかった」との評価に留めて、ドロシーを「兄のワーズワスがいなくても、充分注目に値する書き手であった」とほめる De Quincy の言葉に一石を投じている（Woof［1988］：74-75）。

このウーフ氏の言は決してドロシーを批判しているのではなく、むしろワーズワス兄妹連携プレイの素晴らしさを謳ったものと言えよう。即ち、ドロシーは「兄のワーズワスの存在なしに」は、秀でた日記も卓抜な手紙も書けなかったという意味である。ウーフ氏の言は尤もである。同様に、ワーズワス自身も、妹ドロシーの存在なしに、仏革命の余波や都会の人間不信を乗り越えることはできなかった。イェイツ（William Butler Yeats, 1865-1939）が言うように、詩の根本が心の “quarrel” であるなら（Woof［1988］：41）、文を書くことで心を安らがせる術を知っていたドロシー（Dorothy Wordsworth：1）は、詩作の最盛期以前から兄の情操に深く作用していたに違いない。

本稿は、詩人の詩作最盛期以前を振り返りながら、妹ドロシーの感受性が、初期から詩人ワーズワスの精神成長の座標として作用し、彼の詩作の方向性を決定づけていたことを確認したい。

1. ワーズワス兄妹の生い立ち

ワーズワスは1770年４月にワーズワス家の次男として、妹のドロシーは翌年1771年12月に長女として生まれている。さらに翌年12月には二男のジョン、1774年６月には三男のクリストファーが生まれ、ワーズワスの兄リチャードも含めて５人兄妹である。

父ジョン・ワーズワス（John Wordsworth, 1741-1783）は、ジェームズ・ローサー卿の下で働く法律代理人であった。ローサー卿が、コッカーマ

スきっての有力な大地主であったため、詩人ワーズワスと兄妹たちはその大邸宅の一角で幼少期を過ごすことになる。(Moorman：5)。ごく初期から、興味や関心の対象が似ていたワーズワスと妹ドロシーは、屋敷の中にいるよりは、外界の自然と戯れて過ごすことが多かった。これは彼等の詩や日記書簡を見れば明らかである。二人が成人してから選ぶ慎ましい同居生活と、出生当時の優雅な生活とのコントラストは印象的である。世間の辛辣な批判――“Wicked Jimmy”、“The Bad Earl”（Newlyn：2）を受けていた父の雇い主ローサー卿との半同居生活が、まだ表現する術すら持たない幼い二人の心中に、当初から消化しきれない陰影を投げかけていた可能性がある。

下に引用するワーズワス *Was It For This*（以後 *WIFT* と記）の冒頭部や、同じ場所について後年書かれた妹ドロシーの手記（次に引用）は、出生当時の裕福さにまるで刃向うかのように、初期から原始的な自然界に心動かされていた兄妹の共通性を示す。先ず、ワーズワス1798年の詩の中に、詩人幼少期ダーワント川の思い出を振り返る。

> . . . the fairest of all rivers, loved
> To blend his murmurs with my nurse's song,
> And from his alder shades and rocky falls,
> And from his fords and shallows, sent a voice
> To intertwine my dreams? For this didst thou,
> O Derwent, traveling over the green plains
> Near my sweet birth-place, didst thou, beauteous stream,
> Give ceaseless music to the night and day,
> Which with its steady cadence tempering
> Our human waywardness, composed my thoughts
> To more than infant softness, giving me
> Amid the fretful tenements of man
> A knowledge, a dim earnest of the calm
> Which nature breathes among her woodland haunts?
> （*Was It For This*［以後 *WIFT* と記］2-15）

彼は７歳で母親を亡くし、13歳で父も亡くしている。従って、ワーズワス兄妹はごく幼い時期に孤児になるという苦境を経験するのだが、この詩行が幼少期のいつの時期を詠んだものにせよ、読み進めていくと、幼き日の思い出に、家族親族や友人が全く登場しないのに稀有な感を覚える（Newlyn：83）。

一方、同じ場所について、ドロシーも以下のような思い出を綴っている。兄妹の想像力が水の流れと深いかかわりがあることを想起させる重要な資料である[1]。さらに、兄の詩と比較して妹の手記は、自然描写だけで無く、そこに生息する小さな生き物たちのきらめきに思いを寄せているのが特徴である[2]。

> It is at the outskirts of the Town, the garden bordering on the River Derwent, or rather a Terrace which overlooks the River, a spot which I remember as vividly as if I had been there but the other day, though I have never seen it in its neatness, as my father and Mother used to keep it, since I was just six years old, a few months before my Mother's death. I visited the place again at the age of twenty three and all was in ruin, the terrace-walk was buried and choked up with the old privot [privet] hedge which had formerly been most beautiful, roses and privot intermingled—the same hedge where the sparrows were used to build their nests.[3]
>
> （Selincourt［1967］：616）

先に引用した兄の詩の中には両親も兄妹も登場しなかった（Newlyn：83）のと比べて、ドロシーの手紙は自然描写のみならず、そこに集まる家族の営みが一体となって書き込まれていることに留意したい。

2. 詩人ワーズワスの気性について

さて、小柄で頑強、そして青ざめたような風貌を持つワーズワスは、ともすれば周りから誤解を受けることもしばしばであった（Laurence：147）が、

その頑強さや激しさは詩を生み出していく動力でもある。そんな彼の生まれながらの内面を感じさせるエピソードを幾つか引用する。

まず、彼の性格を危惧していた母の思いとワーズワス自らの反省を振り返ってみたい：

> . . . she [WW's mother] once said to her [Miss Hamilton, a friend of hers], that the only one of her five children about whose future life she [WW's mother] was anxious, was William [Wordsworth] ; and he, she said, would be remarkable either for good or for evil. The cause of this was, that I [Wordsworth] was of a stiff, moody, and violent temper ; so much so that I remember going once into the attics of my grandfather's house at Penrith, upon some indignity having been put upon me, with an intention of destroying myself with one of the foils which I knew was kept there . . .
>
> (Christopher Wordsworth：9)

親や親族のしつけに抗う傾向は、若いうちに誰もが経験することであり、ワーズワスの少年時代が特別というわけではなかろう。しかし、この場面で彼が見せる頑なさは、まさしくダーワント川に呼びかけていた前述の詩行の "human waywardness" に相当し、逆に "infant softness" があまり感じられない詩人の姿でもある。成熟過程にある少年にありがちな傾向であるが、この頑なさは彼が成熟してからも続いていたようで、朋友コールリッジも以下のように言を残す。

> 'My many weaknesses', he said, 'are of some advantage to me ; they unite me more with the great mass of my fellow-beings—but dear Wordsworth appears to me to have hurtfully segregated and isolated his being. Doubtless his delight was more deep and sublime; but he has likewise more hours that prey upon the flesh and blood.' Many an entry in Dorothy's Journals bears witness to the truth of this last part of Coleridge's diagnosis.
>
> (Moorman：435-436)

自分の心の弱さは欠点に違いないが、その欠点こそが多くの友を集めるのだと自負するコールリッジは、逆に、親友ワーズワスは崇高なものを求めるあまり、孤独な世界に引きこもってしまいがちであると、冷静にワーズワスを批判する。

さらにダンカン・ウーもワーズワス少年期の特異性に目を留めている：

> Wordsworth was aware that he had such an intense imaginative existence that he was in danger of losing touch with physical reality; he later remarked: 'Many times while going to school have I grasped at a wall or tree to recall myself from this abyss of idealism to the reality'
>
> (Wu [1997]: 42n.)

ワーズワスが少年期から持っていた独特の想像力は、時に学校への道すがら、現実の物理的感覚を失わせるほどであった。その不思議な現象への恐怖から、登校時、よく壁などをつかんで自分を現実世界へ引き戻す努力さえしたと言うのである。冷静に見れば、少し風変わりな側面もある彼は、一般人が語らないような独特の世界を他人にどう説明して良いかもわからず、子供なりに疎外感を感じることが少なくなかったと推察される。

3. ワーズワス少年期の思い出— "human waywardness"

人間の内に秘められた想像力の実態を知る上で、ひとつの手掛かりになるのは、その人が幼少時代をどのように謳歌したかということではなかろうか。例えば、親からの監視の目を離れてのびのびと過ごす外遊びの中で、少年期のワーズワスはどんなふうに自然と接していたろうか。そんな資料を彼の詩の中から二、三引用する。

幼少期からスケールの大きい自然に囲まれていた彼は、孤独な冒険を自然界で繰り広げながら無意識のうちに自己の情操を培っていった。以下に掲げる詩行は、*The Prelude* の中で "Spots of Time"と呼ばれる箇所の一部で、

彼にとって少年期の大切な思い出の瞬間を捉えているとされる。先述したダーワント川に寄せる詩に続いて同年1798年、ドロシーとの語らいの中で泉のように湧き出た詩句である。

For this in springtime, when on southern banks
The shining sun had from his knot of leaves
Decoyed the primrose flower, and when the vales
And woods were warm,

（*WIFT* 30-33）

太陽が光を集めて光がサクラソウを誘う早春のひとときを思い出している。長かったイギリス北部の冬が明けて、谷間と森も次第に暖められていく。自然が命を芽吹いて生き生きと目覚め始める季節、彼はひとり春の野に繰り出す。

. . . was I a rover then
In the high places, on the lonely peaks,
Among the mountains and the winds? . . .

（*WIFT* 33-35）

1805年の改訂原稿では “rover” ―放浪者、が “plunderer” ―略奪者（*The Prelude* 1. 336）に変わり、あの頃、自分の内部に流れる生命力は、自然に脅威を覚えながらも自然を破壊するような傲慢さが伴っていたことも思い出していくようになる。この詩行は、その自分の内部の起爆剤を自覚していく行でもあることに留意したい：

. . . Though mean,
And though inglorious, were my view, the end
Was not ignoble. Oh, when I have hung
Above the raven's nest, have hung alone
By half-inch fissures in the slippery rock
But ill sustained, and almost (as it seemed)
Suspended by the wind which blew amain

Against the naked crag,

（*WIFT* 33-42）

この頃、カラスの卵を取ることは、害鳥を減らし、害鳥から作物を守るため子供のお小遣い稼ぎとして許されていたことをジョナサン・ワーズワスが記している（Jonathan Wordsworth [1995]：559-60, 以後 Jonathan と記）。岩場にぶらさがって卵を取ろうとしているさなかの自分は、弱者である卵をかっさらう冒涜の徒、或いはお小遣い欲しさにワタリガラスの卵を取ろうとする「さもしい」= “inglorious” 少年であると捉えられている。しかし、とてつもなく豊かな自然に洗われ、自身の不遜な心が大いなる自然の審判にさらされる：

. . . ah, then,
While on the perilous edge I hung alone,
With what strange utterance did the loud dry wind
Blow through my ears! The sky seemed not a sky
Of earth—and with what motion moved the clouds!

（*WIFT* 42-46）

吹きすさぶが風の音—— “strange utterance” が少年を不思議な世界へと誘っていく。捉えどころのない自然界の声であると同時に、独りよがりな少年をより大いなる手に引き渡し、やわらかく浄化して行く風でもある。

同様に、自然界の鳥との思い出を綴った箇所がもう一篇ある。以下の引用は、同じく “Spots of Time” に含まれるエピソードで、少年期に他人のヤマシギを盗んだ思い出が綴られている。先述したお小遣い稼ぎのエピソードに比べ、小さいながらも窃盗を働いていて、より衝撃的である。

. . . In thought and wish
That time, my shoulder all with springs hung,
I was a fell destroyer . . . .

（*WIFT* 81-83）

胸を弾ませながら、ばね仕掛けの罠をしょって、自分は、まるで山あいの反逆者（“fell” は北英英語で「荒れた高原地帯、丘陵、山あい」の意）だったと振り返っているから、再び自然界に手を掛けてそれを統治しようとする冒涜の徒として描かれている。月の光に導かれ，怪しげな外界の誘惑に身を焦がすこの場面、彼は、錯覚の中に降り立ったように自分をつかみきれずにいる。そんな中、

> . . . Gentle powers,
> Who give us happiness and call it peace,
> When scudding on from snare to snare I plied
> My anxious visitation, hurrying on,
> Still hurrying, hurrying onward, how my heart
> Panted ; . . .
>
> （*WIFT* 83–88）

“Gentle powers” は神の力、猛々しいものでは無いが大いなる自然の力として表現されている。今、ゴスラーで魂の迷走を経験し、自分の魂の在り処を探している詩人[4]は、ここでも昔のことを振り返りながら自分の反逆精神が自然の大いなる力に抱かれた貴重な体験を思い出す。

この部分について、ジョナサン・ワーズワスは heart panted—「心が渇望する」（87–88）が詩篇42章 1 節の “hart panted” に重なり “As the hart panteth after the water brooks, so panteth my soul after thee . . .”（神よ、しかが谷川をしたいあえぐように、わが魂もあなたをしたいあえぐ）を無意識に思い出したのだろうとしている（Jonathan［1988］：43）。無意識に重ねたのであれば、他人のものを懐に入れようとする傲慢さとそんな刹那に贖罪を求める心の柔和さ、そんな心の “The Borders of Vision”（Jonathan［1988］タイトルより引用）を謳った箇所なのかもしれない。以下最終部へと続く。

> Sometimes strong desire

Resistless overcame me and the bird
That was the captive of another's toils
Became my prey, and when the deed was done
I heard among the solitary hills
Low breathings coming after me and sounds
Of undistinguishable motion, steps
Almost as silent as the turf they trod.

（*WIFT* 90-97）

"Low breathings" は外界の風であると同時に心の内部に吹いた贖罪の風、その内と外の境界さえわからなくなって、"undistinguishable" という表現になる。

以上、"Spots of Time" と呼ばれる幼少期思い出詩から、ワーズワスの冒険、自然界の中ひとりで生き物たちと接触した思い出詩について分析した。共に、自分では制御できない冒涜心と、大自然が投げかけてくるはかり知れない包容力の狭間で、角張った心が幽かに解けていく瞬間、或いは二者が混濁した深淵の嵐を感じさせる箇所である。

4. ワーズワス少年期の思い出— "infant softness"

上記の詩が、詩人少年期の "human waywardness" を物語っているのに対して、これから引用する妹ドロシーとの子供時代の思い出は、同じ時期を描いていながら、例えばダーワント川に呼びかけた冒頭の詩に例えるならば、まるでドロシー自身が "infant softness" を教える詩霊のような役割を担っていることが感じられる作品である。

最初に引用するのはグラスミア滞在時に書かれた一篇である。書いた時期は先述した孤独な冒険詩の数年後である。

The Sparrow's Nest
Behold, within the leafy shade,
Those bright blue eggs together laid!

On me the chance-discovered sight
Gleamed like a vision of delight.
I started—seeming to espy
The home and sheltered bed,
The Sparrow's dwelling, which, hard by
My Father's house, in wet and dry
My sister Emmeline and I
　　Together visited.　10

She looked at it and seemed to fear it;
Dreading, tho' wishing, to be near it:
Such heart was in her, being then
A little Prattler among men.
The Blessing of my later years
Was with me when a boy:
She gave me eyes, she gave me ears;
And humble cares, and delicate fears;
A heart, the fountain of sweet tears;
　　And love, and thought, and joy.　20

(1801)

この詩は、幼少期にたまたま見つけたスズメの巣を妹と連れ立って見に行った思い出を綴ったものである（Hayden：981）。卵の青さが眩しく兄妹の心を捉え、小さな命のきらめきに歓喜する瞬間である。後半で、そこに流れる優しい調べが、傍にいる妹から発せられていることに気付かされていく。先述のダーワント川に呼びかけた詩と読み比べてみると、ダーワントに呼び求めていた “infant softness” は、この詩では、妹の穏やかな愛の息づかいに取って代わり、ドロシーが ”infant softness” と同様のやわらかい感覚を呼び起こしているのがわかる。川のほとりにあったテラス “roses and privot intermingled—the same hedge where the sparrows were used to build their nests”（Selincourt［1967］：616）を綴った妹のやわらかい息づかいが、この詩の中で兄の詩的センスと調和する。“The Sparrow's Nest” は、そん

な兄妹の連携プレイが、ごく初期のささやかな思い出に端を発していることが見抜ける作品と言える。自分の情操の成熟を自然界のリズムに託す詩人の意識下には、自然界の力と重なるように常にドロシーの存在があって、共に協調していることを実感させる。

さらに、同じく幼少期に妹と見た蝶々の思い出詩を辿りながら、詩人が川の流れに託す "infant softness" とドロシーとの共通性を裏付けたい。

To a Butterfly

Stay near me—do not take thy flight!
A little longer stay in sight!
Much converse do I find in thee,
Historian of my infancy!
Float near me; do not yet depart!
Dead times revive in thee:
Thou bring'st, gay creature as thou art!
A solemn image to my heart,
My father's family!

Oh! Pleasant, pleasant were the days,
The time, when, in our childish plays,
My sister Emmeline and I
Together chased the butterfly!
A very hunter did I rush
Upon the prey:—with leaps and springs
I followed on from brake to bush;
But she, God love her! Feared to brush
The dust from off its wings.

(1802)

既にイギリスとフランスが一触即発の空気を放っていた詩人の少年時代に、彼はイギリス・フランス間の確執に煽られて、「白い蝶々はフランスの化身」とばかりに傷つけて遊んでいたのに対して（Woof［1991］：78)、妹は人間のしがらみとはまるで無関係に、無垢な心で蝶々の命のきらめきだけを見つ

めた、そんな記憶を辿った作品である（Hayden：976）。ウーフ氏も指摘するように、ドロシーの自然への慈しみは、生まれながらにあって（[1988]：22–23）、常に自然に対して従順な少女であった。この詩に於いても、ワーズワスは、最初のスタンザで、蝶々のきらめきがどんなに眩しく兄妹の心を捉えたか、後半ではその感動は感受性の鋭い妹の息づかいから来ていることを記していく。

ここでも気づかされるのは、ダーワント川の詩に始まる “human waywardness” との色調の差である。外界の刺激に煽られて生まれた冒涜心やむら気はすっかり鳴りを潜めて、自然に対して従順な赤子のような柔和さが湧きあがっている。この詩を書いたころ、湖水地方の住処ダヴ・コテージが兄妹の “shared love” の象徴であった（ibid.：43）ならば、子供時代に二人が共有した小さな生物への思いもまた然りである。

1793年になってドロシーはジェイン・ポーラードに手紙を書き、兄の性格として ‘violence of Affection’、‘sort of restless watchfulness’、‘Tenderness that never sleeps’、‘Delicacy of Manners’ を挙げている（ibid.：8）。ひとりで過ごした時間を綴った詩群と、妹と過ごした思い出を綴った詩群に分けて読み比べてみると、その色調に明らかな差が感じられ、言わば ‘violence of Affection’ と ‘sort of restless watchfulness’ は “human waywardness” にも通じる前者の詩群のエッセンスと繋がっているのに対し、‘Tenderness that never sleeps’ と ‘Delicacy of Manners’ は、“infant softness” に通じる後者の詩群のエッセンスと繋がっているようである。「幼児のような柔らかさ」への憧憬は、無意識にドロシーへの愛情が深く作用して生まれていると言わざるを得ない。通常、妹からここまでの感化を受けることは稀であることを考慮すれば、ワーズワスの “human waywardness” の制御に、ドロシーの “infant softness” が稀有な効果を発揮していることは注目に値する。

5. 1795年詩人の自覚

先述した妹からの感化は、1794年ウィンディー・ブロウで妹と共に過ごした、或いは1795年から共に過ごしたレースダウンの２年間の間に自覚していくことになる。その当時の自覚の程を示す詩行が、1805年になってからレースダウンの日々を綴る *The Prelude* 10巻に登場する。

And then it was
That the belovèd woman in whose sight
Those days were passed (now speaking in a voice
Of sudden admonition, like a brook
That does but cross a lonely road; and now
Seen heard and felt, and caught at every turn,
Companion never lost through many a league)
Maintained for me a saving intercourse
With my true self. For, though impaired and changed
Much, as it seemed, I was no further changed
Than as a clouded, not a waning moon.
She, in the midst of all, preserved me still
A poet, made me seek beneath that name
My offce upon earth, and nowhere else.
（*The Prelude* X, 904-20）

この詩行は、レースダウンで過ごした日々を思い出して妹の存在の深さを綴った箇所であることはジョナサンが明記している（Jonathan［1995］: 641）。自分の意識の流れが雑念に惑わされて停滞するときに、やわらかく包んでひとつの流れに戻してくれる助け手がドロシーであることを、詩人は少しずつ自覚していった。上記の引用箇所は、妹がダーワント川の流れさながら本来の自分の情操を紡ぎ出してくれることを自覚して物語っている。

レースダウンに滞在した1795年、1793年以来仏革命への一時傾倒と父無し子を作った不面目を、叔父のウィリアム・クックソンに激しく責めたてられ

ていた詩人は（Woof［2013］：30）精神的に萎えていたに違いない[4]。しかし、対話を通して精気を取り戻し、その低迷期の中で自ずと築かれていった兄妹の絆は、“human waywardness” から “infant softness” へと変容されながら “a dim earnest of the calm”（*WIFT*）の大海に繰り出して行く。ワーズワス兄妹の生い立ちを詩や書簡から精査することは妹の “infant softness” が良き “living help” となって “regulate [his] soul” し、着々と詩人の詩的水路が築かれた過程を知る上で重要である。そのために、本稿でその一例を示唆したように、彼ら自身の水の流れへの深い関心を考慮に入れながら、意識の流れを水流に置き換えて考察することも大きな鍵になる。

結　　び

以上、ワーズワス兄妹の対話から生まれた若き日の思い出詩や手記をそれぞれ読み比べながら、兄妹若き日の心のやりとりを追い、1798年に綴られた詩人ダーワント川への深い思いは、そのままドロシーの存在と協調している可能性について考察した。この兄妹の詩的やりとりを細かに考察すると、やがて詩人が自身の詩核― “primal sympathy”（*Immortality Ode* 182）や “still sad music of humanity”（*Tintern Abbey* 92）に目覚めていく過程で、兄妹の関係が不可欠要素であったことが見えてくる。

さらに、英文学史の観点から俯瞰すれば、本稿で述べたワーズワス兄妹の関係は、兄妹間に留まらず、当時のイギリス文化や社会概念変革の縮図を示していると言える。何故なら、それまでイギリス国内で、森が無法地帯とされ、密猟や盗賊の温床と見なされてきたことは、ドロシーに審美主義的影響を与えたウイリアム・ギルピンでさえも認めているからである（Woof［1988］：24-25）。イギリス国民の概念の中では、未開のままでは無法地帯でしかなかった自然（パストラル詩が見せる理想郷としての自然は例外）が現実感を伴った柔和な愛を育む対象として庶民の中に根付いていくまでには多くの課題があった。事実ケニス・クラークやマイケル・ローゼントール、さ

らに上述したギルピンも、当時活躍した画家ゲインズ・ボローの田園風景や、そこに描かれた楚々とした人間美の描写に現実感が欠けていることを指摘し（Clark 270-271；Rosenthal：204, 207-210）、彼の画風の中に、上からの自己欺瞞を煽る傾向があるとしている。〈自然〉に対して微妙な意識変化をみせた18世紀から19世紀のイギリス概念の変遷を精査する資料として、ワーズワス兄妹若き日の思い出がひとつの雛型になる。

本来、個人史に留まらずそのような時代的、文化的影響を基軸に論旨を展開していくべきであろうが、今回、〈ワーズワスと妹ドロシーの関係〉という基調課題に敢えて向き合う目的は、研究者のみならず多くの読者と共にワーズワス兄妹の足跡を追体験し、文学が斜陽傾向にある現代において、文学の神髄とは何かという問いを共有したいという切なる願いからである。本誌の品格を損ねないよう留意したつもりであるが、幾分エッセー風になっていることをご容赦いただければ幸いである。

註

1. ワーズワスの自叙詩 *The Prelude* の初稿冒頭句は、“Was It For This...” で始まるダーワント川の描写である。そして、長年改訂した後、最終巻で詩人の意識はまた暗い洞窟の水源に帰っていく。

    ....we have traced the stream
    From darkness and the very place of birth
    In its blind cavern, whence is faintly heard
    The sound of waters... （*The Prelude* 13, 172-175）

    また、ドロシー・ワーズワスが1798年の１月から書き綴った *Alfoxden Journal* も水の流れの描写から始まっている。

    Alfoxden, 20th January 1798. The Green paths down the hill-sides are channels for streams. The young wheat is streaked by silver lines of water running between the ridges...

    丘や谷間を練り落ちる小川の流れのように書き連ねられていく彼女の意識の推移を予感させるものである。このように、兄妹に共通して自己の意識を水や風の流れになぞらえる傾向がある。

さらに、ワーズワス兄妹が朋友コールリッジと計画した詩 “The Brook”（未完）も、水の流れと人間の意識の共通性を描こうとしていた（Coleridge：196）。

2013年グラスミアで行われたワーズワス・カンファレンスでは、リチャード・グラヴィルも、ワーズワスが書いた ‘Lines On Nab Well’ の説明で、ワーズワスの詩と水との深い関連に言及している。

> Henry Crabb Robinson recorded in his diary that the lines on Nab Well were meant to introduce a lengthy portion of The Recluse [Wordsworth's poem] offering ‘a poetical view of water as an element in the composition of our globe’. （Gravil 140）

2. ドロシーの小鳥の観察記述は、常に愛情に溢れ且つ細やかである。特に、*The Grasmere Journal* 1802年６月16日から25日までの間には、ツバメの家族が自宅の窓辺にやってきて巣作りを始めたこと、殆ど巣が完成したのにそれが落ちてしまった時の彼女の落胆と悲しみ、住処を無くしたツバメたちが身を寄せ合っている様子、最初にツバメたちが窓辺に来た時の思い出、トレモロのさえずり等を克明に綴っている。同月29日には住処を失ったツバメたちが、同じ場所で再度巣作りに挑戦しようとする姿も日記に記している（Woof［1991］：110-15）。
3. 1805年８月７日、コレオルトン・ホールのジョージ・ボーモント卿の妻に宛てた手紙。ボーモント夫妻は、新婚旅行で既に湖水地方のケジック地方を訪れていてイギリス北部の自然に造詣が深かった。1798年、ワーズワスとコールリッジが出版した『抒情民謡集』を既に読んでいた夫妻は、1803年ワーズワスに会い、ケジック近くのアプルスウェイトの所有地をワーズワスに提供している。そんな縁から、ドロシーと夫人も多くの手紙を交わしている（Woof［2013］：2）。
4. フランスで経験した革命精神への傾倒とフランス女性との恋愛が、両方成就しなかったことで、1793年以後のワーズワスは魂の迷走状態にあった。特に1797年サマセットで過ごした頃のワーズワスについては、フィービー・リーズが書いた演劇 *The Miraculous Year or Dorothy Wordsworth in Somerset*（Cressrelles Publishing, 1971）或いは、拙訳『奇跡の年―サマセットのドロシー・ワーズワス』（音羽書房鶴見書店、2013）も参照されたし。ワーズワス兄妹の1793年以後の心の葛藤は、そのテーマを扱う別の拙論でもう少し詳しく述べたい。

Works Cited

Clark, Kenneth. *Civilisation : A Personal View*. London : British Broadcasting Corporation, 1969.

Coleridge, Samuel Talor. *Biographia Literaria*. James Engell and W. Jackson

Bate ed. Princeton : Princeton University Press, 1983.

Gravil, Richard. 'Wordsworth's Sacred Sites : a Short Tour.' *Grasmere, 2013*. Richard Gravil comp. Penrith : The Wordsworth conference Foundation, 2013.

Lawrence, Berta. *Coleridge and Wordsworth in Somerset*. Bristol : David & Charles : Newton Abbot, 1970.

水野　薫　『奇跡の年――サマセットのドロシー・ワーズワス』　音羽書房鶴見書店、2013.

Moorman, Mary. *William Wordsworth ; A Biography ; The Early Years 1770-1803*. London ; Oxford ; New York : OUP, 1968.

Newlyn, Lucy. *William & Dorothy Wordsworth : All in Each Other*. Oxford : OUP. 2013.

Rees, Phoebe, M.. *The Miraculous Year or Dorothy Wordsworth in Somerset*. (Cressrelles Publishing, 1971)

Rosenthal, Michael. *The Art of Thomas Gainsborough*. New Haven / London : Yale University Press, 1999.

Woof, Pamela. *Dorothy Wordsworth, Writer*. Grasmere : The Wordsworth Trust, 1988.

――. *Dorothy Wordsworth : Wonders of the Everyday*. Grasmere : The Wordsworth Trust, 2013.

Wordsworth, Christopher, D. D.. *Memoirs of William Wordsworth : Poet-Laureate I*, D.C.L.. London : Edward Moxon, 1851.

Wordsworth, Dorothy. *The Grasmere Journals : Dorothy Wordsworth*. Ed. Pamela Woof. Oxford ; New York : OUP, 1991.

Wordsworth, Jonathan. *William Wordsworth ; The Borders of Vision*. Oxford : Clarendon Press, 1988.

Wordsworth, William, Wordsworth, Dorothy. *The Letters of William and Dorothy Wordsworth : The Early Years 1787-1805*. Arranged and Ed. Ernest de Selincourt. Chester L Shaver. revised. Oxford : OUP, 1967.

――. *William Wordsworth: The Poems Volume One*. 1977. Ed. John O. Hayden. London et al.: Penguin Books, 1990.

――. *The Thirteen-book Prelude*. Ed. Mark L. Reed. Ithaca and London : Cornell University Press, 1991.

――. *Romanticism : An Anthology*. Ed. Duncan Wu. Oxford : OUP, 1994.

――. *William Wordsworth : The Prelude : The Four Texts (1798, 1799, 1805,*

1850). Ed. Jonathan Wordsworth. London et al : Penguin Group, 1995.
——. *William Wordsworth : The Five-Book Prelude.* Ed. Duncan Wu. Oxford ; Massachusetts : Blackwell Publishers, 1997.